

CL 寓話

賭に勝つコツ



年老いた賭博商の周りに、群衆が集まっていた。口ひげを生やした青白い顔のこの男は、外れの賭け金を、一ドルずつではあるが、素早く稼いでいた。彼の目は、一度にあらゆる方向に向いているようだった。次のカモを品定めし、警官に注意し、三つの紙コップの下で豆を巧みに扱うという具合に。

レニーは街に着いたばかりだった。彼は人だかりに気づき、何がこんなにたくさんの人を引きつけているのかと近づいて行った。ともかく街の生活を知りたかったので、この人だかりが何かを知る必要があった。レニーはまだ14才であったが、機敏さと、自分は一人だということをしっかりと把握することで、経験のなさを埋め合わせた。

「何をやっているんですか？」彼は、色褪せた縞柄の背広を着た中年の男に尋ねた。

「昔の貝殻賭博だよ、坊や。見たことないのかね？」

「いいえ、全然。どうやるんですか？」レニーは疑問に思っただけ聞いた。

「簡単さ。あの男が、どれかのコップの下に豆を隠すから、どのコップの下にあるか当てるんだよ。君が勝てば、自分の賭け金と彼の賭け金がもらえるんだ」

「すごく簡単そうですね」とレニーは言った。「左はしのコップの下ですね」レニーの賭けが当たった。

「次は真ん中のコップの下です」

また当たり。

「今度もまた左のコップの下」

そしてまたレニーに賭け金が入った。

縞柄の背広の男は感心した。彼はレニーに二、三ドル賭けて、賭博商が別の賭け事に移る前に、自分の金が三倍になるのを見届けた。

「君はすごい才能を持っているね」男はレニーを称賛し、儲けた金を分け合った。

「自分の見たことを言っただけなんです」

「はっきり見て、見たことを他人に知らせることは、最高の芸術だよ」縞柄の背広の男は、一瞬真顔になった。そしてニヤッと笑って、群衆の中に姿を消した。

事実があるがまに見ることに取り組むのが難しい人がある。見た事実を明確に伝えることは、大抵の人にとっては簡単なことではない。しかし、その方面に努力することで、私たちの努力は価値あるものになるのである。